

船

はつしん

行事の開催を告げるときに上げられる花火のよう
な音がぼん。ぼん。ぼん。と響く。

おんまにばどめふん。

おんまにばどめふん。

おんまにばどめふん。

真言マントラが空を裂く。

少し間を置いて水面が爆ぜると、その衝撃がわた
しの足下にも伝わってくる。

水柱と揺れが収まると、陽光の下でもわかるくら
いの不気味な赤い光を放つブイがまだいくつか揺れ
ていた。

「サンプル一、三。反応消失」

船の上から春苑さんが戦果を記録しながら報告
し、光を失ったブイを引き揚げる。

妹との秘め事と密かな約束から数週間。わたしは
ちは実技と座学の両面から、艦娘としての訓練をし
ていた。

◆
実技はまず、船魂を憑依させ、武器の接続も行なう経フィラクター箱を背負い、水上歩行用の装具を身につけて海の上に立つことから。

漁港の内側、防波堤で波が弱くなっているとはいえ、最初は揺れ続ける地面の上でバランスを取るのも大変だった。何度か転んでしまい、その度に妹や電さんに助け起こされた。装具の概念地平補正で水面に倒れこむだけで溺れはしないのだが、それでもいくらか水を被る。

そんな初訓練が終わると、艀装を外し終えた妹は、遅れてシャワーを浴びたわたしにココアを準備して待ってくれていた。

彼女は最初こそ足下が危なっかしいところもあったが、すぐに慣れ、水面を軽快に走るようにまですっていた。彼女に言わせれば、両足に一輪車がついているような感じらしい。

『もっとも、オレたちの相性がいいせいかもしれないね
ーけどな』

「そうそう。昔からのコンビみたいにしっくりくる
んだよな」

妹と天龍さんの声がハーモニーを奏でる。

『艦娘と艦装の同調は私たちの仕事だから、あなたはあまり気にしないで』

わたしの中から、龍田さんの声も響く。

渡された資料にもそうある。艦娘が身につけた艦装を船だった頃の記憶で動かすのが船魂の役割で、艦娘、艦装、船魂の同調には個人差があるらしい。

座学の内容は、艦娘という仕組みの基礎について。かつて存在した船という巨大な情報、船魂を依代となる人間に憑依させ、靈力を圧縮して高密度で巨大な靈的質量を持つ力場と化す。それが艦娘。

だから、同じく思惟層に靈的質量を持ち、靈的攻撃をしてくる深海棲艦との戦いでは、ピンポイント

ではあるが呪術弾道弾に匹敵する出力を持つ、らしい。

「そういえば、敵に船魂の力場を直接ぶつけることはできないんですか？」

ある日の講義後、何の気なしに春苑さんに質問した。そこまで力場が巨大なら、葬具につけた武器より、それを直接使えばよさそうな気がしたからだ。

「それはそうなんだけど、それっていわゆる超能力や魔法だから」

答えを理解できない顔をしていたからだろうか、続けて言葉が出てきた。

「思惟層で何かをやるためには、現実を書き替える明確なビジョンが必要ってこと。いつか妹さんが言っていた、水月を斬るみたいなやつね」

春苑さんは講義中ほとんど口をつけないまま冷めたコーヒーを一口飲み、続ける。

「それには頭の中で像を結ぶための訓練や経験が必

要。でもそんなの待ってられないから、魔法のステッキを振れば魔法が使えるようになるための呪術兵器を噛ませてるってわけ」

まるで講義の続きだ。思わず頷きながら聞いてしまふ。

「だけど、そう考えることは悪くないわ」

だから無駄と言われることを予想していたが、違った。

「こうできないか。そう考える、意志することが第一歩だから」

いつか見た意味深な笑みで春苑さんが笑う。

そのときわたしは納得した。

そうか。

この人は、そっち側の人でもあるんだ。

拝み屋を自称してはいたものの、いまひとつ実感のなかったことが、何か明瞭になった。

「頑張りなさい」

そう言うと人差し指で額をつつくと、笑顔を浮かべたままこちらの返事もそこそこに行ってしまった。



そんなことから数週間。わたしと龍田さんのコンビもお互い慣れてきたようで、妹と天龍さんのように水上をスケートのように走るとまではいかないけれど、移動や兵装を使う程度なら、防波堤の外でもなんとかできるようになってきた。

今は深海棲艦から採取された組織の欠片を埋め込んだサンプルを使い、呪術兵装の試験を兼ねた訓練をしていたところだった。

「摩^{マニセル}ニ弾はカタログ通りの効果を発揮してるよのです。過剰浄化も汚染と相殺できているのです」

陸に上がり、データ分析をしていた電さんが、春苑さんに報告する。

「善哉善哉。これなら量産もできるし、汚染深度の

低い場所ではこれをメインに行けそう。じゃ、残りも片付けましょうか」

春苑さんは満足そうに頷くと、残りのブイをわたしたちの方へ流してくる。

ぼん。ぼん。ぼん。と、砲の音。

おんまにはどめふん。

おんまにはどめふん。

おんまにはどめふん。



訓練が終わると、わたしたちのオフィスである鎮守府の建物に戻って食事を取り、その後は書類仕事に待っている。

国土交通省の研究機関という名目なので、関係する役所や研究機関とやり取りするための書類が結構あるのだ。

そんな暖かく弛緩した、丁度眠たくなる午後空の中、伸びをしながら妹が言った。

「所長。兵装のことだけど、刀みたいな武器がほし
いんだよな」

「うーん。どこかが作ってたかもしれないけど、艦
娘が正面切って戦うのはリスク高くてね」

「自分で何かやってないと物足りないんだよ。訓練
で使うだけでもいいからさ」

「わかったわ。うちにもあったはずだし、探してお
きます。でも安全第一ということを忘れないこと」

わたしたちも一応観測したり兵装の基本的な動作
を行ったりするが、メインの照準や発射は船魂が船
だった頃の記憶を元に行なう。

だから、実際艦娘であるわたしは何かしていると
いう実感は少ない。船魂の龍田さんに体を貸してい
る感じだ。

武道の心得もある妹は、そんなところが物足りな
いのだろう。でも、無茶はやめてほしい。

「危ないことしたらだめだよ」

一応釘を刺しておく。幸せにしてもらう約束なのだから。

「わかってるって」

そんなやり取りを終えると、終業までパソコンで書類を書き、整理する。



定時になれば近くの寮まで思い思いに帰宅する。

春苑さんが提案していた民家で共同生活する案は当たり前だが上に退けられ、無難にアパート一棟を借り上げ、ひとり一部屋で暮らすようになった。

食堂はないから自炊か外食になるが、わたしはできただけ自炊するようにしている。

だから今日も、その辺で何か食べてから帰ると言った春苑さんと電さんを見送り、海辺の道をスーパーまで歩く。

自炊なのは妹とふたり分なので安く上がるのも理由のひとつ。

「今日は何にしようか」

「ん、兄貴が作るならなんでもいいぜ」

買い物をして食事を作っている間も、妹と一緒にいられるのも理由のひとつだ。

妹のなんでもいいにちょっと困りながら、魚売りの場の『初鯉』と書かれたポップが目に残まる。

深海棲艦の出現以来魚介類の値段は上がっているものの、全然手が出ないというほどではない。

「カツオかー。いいな」

妹も笑顔を見せる。値段を確認してパックを手にとると、野菜売り場で玉ねぎやニンニク、生姜を買い、ついでにポテトサラダでも作ろうかとジャガイモも。

「兄貴、これも買おうぜ」

妹が籠にお菓子を入れていく。そんな子どもっぽいところにくすりとしながら、レジへ向かう。

「どうかしたか？ 笑ってる」

「なんでもないよ」

ふたりでいる時間が幸せだから。とは言えず、曖昧に濁す。

『言っちゃった方がいいわよ、天龍ちゃん鈍いから。よく気が合うあの子も多分似てるだろうし』

龍田さんはこう言ってくれるが、わたしにそこを踏み出す勇氣はない。

王子様はお姫様を必ず幸せにする。妹のこの言葉をよすがに、日常を繰り返す。

偽りのお姫様だって、王子様をとりこにすることができると信じて。

だから、今はこれでいい。

「見ろよ兄貴」

帰り道、妹に呼ばれて振り向いた先にあった海は、夕陽の色に輝く夕凧。

それは人の営みなど意に介さない、ただそこにあるだけの残酷な美しさだった。

「綺麗だね」

「そうだな」

海が赤く染まり、深海棲艦が地球の支配者となつたとしても、多分海はこのままだ。

それを感じるものが何を考えていても、いなくなっても、そうあることは変わらない。

だから、地球を守るために戦うなんて、お門違いだ。

わたしは、妹のために。

いつの間にか繋いでいた手を強く握ると、向こうからも握り返される。

そのままふたり肩を並べてわたしの部屋へ帰った。どちらの部屋にも台所はあるが最初に料理して以来道具をこちらに置いていたので、わたしの部屋でやることになっている。

「切るのは俺がやるぜ」

「じゃ、よろしく」

流しに置いた袋から玉ねぎを取り出すと、妹は鼻歌交じりにスライスを作っていく。

自炊を始めたのはわたしがかきっかけだが、実は包丁捌きは妹のほうが上だ。剣道のせいなのかどうかはわからない。

その間にわたしはジャガイモの皮をピーラーでむき、鍋に入れて茹で、ポテトサラダの準備を。

茹で上がると妹はもうタタキになったカツオのさくもひいていたので、盛り付けの前に玉ねぎのスライスを少し拝借し、ジャガイモとマヨネーズ、買い置きのチーズと混ぜる。

「うし、できたな」

妹も皿にカツオを盛り付け終わっていたので、ニンニクを薄く切って散らし、おろし生姜を添える。

「おっと、仕上げ忘れてたわ。サンキュ」

わたしがカツオとポテトサラダをテーブルに持って行くと、そこでは妹がふたり分のご飯をよそって

いた。

「ちょっと多すぎない?」

「もうちょっと食わないと。これまでと違って訓練もやってるんだしな」

『私の分もあるしねー』

龍田さんからまでいつもこう言われているが、そう言われても食べられないものはしょうがない。

「だめ。残しちゃうよ」

「ちえ。ちょっとづつは増やせよ。あとはおかわりとか」

心遣いは嬉しいものの、妹より食が細いのは昔からだから困る。

残すのも嫌なのでご飯を炊飯器に戻し、食べようとしたところで連絡用に持たされている携帯電話が鳴る。

「もしもし。さっき沖合で深海棲地の活性化が確認されました」

さっと背中冷たいものが走る。

「明日の朝一で出撃。としたいけど、そうも言ってもらえないかも。オフィスまで来て待機、よろしく」

「わかりました。今から向かいます」

電話が切れる。只事ではない様子を察した妹が何か言いたげにしていたが、彼女の携帯電話も鳴る。

同じようなやり取りが交わされているのだろう。数分と経たず通話は終わり、妹はその様子をぼんやりと眺めていたわたしの方を向く。

「せっかく食事作ったけど、明日になっちゃうな」

妹は料理にラップをかけ、冷蔵庫へ入れる。反応しあぐねていると、彼女は笑った。

「明日、帰ってから食べないとな」

「そうだね。明日、帰ってから」

こんなときに不謹慎なのだろうか。しかし、微笑み合う。

わたしたちの間に、またひとつ約束が増えたから。

◆
妹と連れ立って黄昏時の道を先程とは逆方向に歩き、鎮守府の建物へ向かう。

さすがに、今度は手を繋いでとはいかないけれど。途中、そちらの方からサイレンと、深海棲地が見されたことや出港の自粛を要請する旨の放送が聞こえてきた。

十分と歩かずに着くと、そこでは既に春苑さんと電さんが機材やパソコンを睨んでいた。

「お疲れ。その辺に座って」
「航行中の船舶からの通報だと上から連絡があったのです」

電さんが画面に何枚か画像を出す。沖合い数キロのところまで発見された異変の分析画像からは、既に半径数百メートルが赤く染まり、物理法則の歪められた深海棲地になっていることが読み取れる。

「既に数体のイ級が回遊してる。幸い、船舶や人身

への被害は出てないけど、航路封鎖や休漁の経済的損失。何より棲地の成長を早めに止める必要があるわ。本来の勤務時間外で悪いけど、出撃よろしく」
わたしの中では春苑さんの言葉が重く響く。

「ああ、ようやく実戦だなー！」

「おふたりの先導は電が行なうのです」

『大丈夫、私はうずうずしてるくらいだもの』

しかし、残りのふたりは意気軒昂。プロフェッショナルな電さんと明るい妹、そして意外と好戦的な龍田さんがいるから、わたしはこうあり続けられるのだ。

甘えかもしれないけれど、今はそれに甘えさせてもらいたい。

「深海棲地の近くまで船で向かい、そこから艦娘が出撃。深海棲艦を倒しながら深海棲地を浄化するのが作戦の概要です」

「向こうはイ級三体ほどなのです。初めてのおふた

りには夕暮れの戦闘で辛いかもしれませんが、船からもライトを当てるなどして支援するのです」

作戦の概要が説明され、特に質問をすることもなかったのですが、みんな黙々と艀装をつけて準備をしているところに、春苑さんが長い包みを持ってやってきた。

「ここに来るとき持たされた機材探したら出てきたわ。艀娘用の刀と槍。沈んでた軍艦から取った鉄で作ったみたいよ」

巻かれた布の中からごろりと出てきた刀の鞘を抜き、妹はにっこりと笑った。

「これで俺も戦えるな！」

『面白い武器じゃねえか。こっちの扱いはお前に任せ』

天龍さんも気に入ったようで、士気がますます上がっているようだ。

しかし、槍は何なんだろう。

「こっちはあなたが持ちなさい」

『おっと、私のサポートが必要かな』

春苑さんがわたしに槍を手渡してくる。ずしりと重い、龍田さんが思惟層の重量を肩代わりしてくれるので、持って構えられないほどでもない。

「でも、武器の使い方とか知らないですよ」

「ん。武器として使うんじゃないわ。魔法の杖として使いなさい」

突然講義のような話になり、きょとんとするわたしに春苑さんは続ける。

「何かを攻撃したいなら、その対象にその槍を向けて念じる。道具を持つことで意志する手続きは楽になるわ」

「この前、講義の後で言われたことですね」

「そう。本来は呪文やイメージもあればもっと楽になるけど、今は急だしこれだけで勘弁してね」

それだけでも、わたしにできることの希望ができ

た気がする。

「ありがとうございます」

「でも、基本は摩尼弾でよろしく。あれは戦力として安定した装備だから」

そんなことをしているうちに全員の装備が終わり、船へと移る。

数十分進んだところで、わたしたちの目にも見え
てきた。

海面に油が撒かれたように、妙な光沢と薄い光を
放ちながらたゆたう赤い海。

わたしたちの船より大きくなっているその海の中
は、こちら側、物理層を支配する物理法則が通用し
ない魔境だ。

航行する船は動きを止め、生物はじわじわと蝕ま
れていく。

だから、人間はそれに抗わねばならない。という

のが、大勢の意見。

しかし、わたしにとってはどうでもいいことだ。

わたしは妹を守るために戦う。

妹の近くにいられる居場所を得るために戦う。

いわば、人類の危機とやらを利用させてもらっている側だ。

『どうしたの？ 同調、うまくいかないけど』

龍田さんの声で我に返る。そうだった、そういう事は置いておいて、ここでは勝たないといけない。

無事に帰らないと、約束を守れないから。

先行する電さん、妹に続き、わたしも海へ出る。

わたしたちが向かう先は船からのライトで照らし出されているので、ある程度様子はわかる。

深海棲地と海との間に、鉄の鱗で体をよろい、青白く目を光らせる古代魚のような深海棲艦が何体かぐるぐると泳ぎ回っていたが、こちらが立てる波に気づいたのか、すっと寄ってくる。

『射程に入れるから、もうちょっと近くに寄っちゃって』

龍田さんの指示に従い、経箱から船魂が持つ質量を後ろに伸ばすと、ぐい。と空気の壁を感じる。一瞬だけロケットのように噴射して、スピードを上げるのだ。

『砲戦始めるね』

ぼん、と音を立てて摩尼弾が発射される。

おんまにばどめふん。

急な移動で発射された位置を掴めなかったのか、深海棲艦の腹をかすめると、深海棲地と同じ色をした赤い油のようなものが飛び散り、金切り声を上げる。

『あいつの声が出なくなるまで行くわよ』

敵と近づきすぎたので、逆方向に船魂の質量を噴かせて後ろに位置取り、発射。

おんまにばどめふん。

しかし、今回もかすり傷。また後ろに嘖かし、もう一度狙おうとする。

おんあみりたていせいからうん。

それに割り込んで海中から水柱が立ち、イ級の腹部がえぐれると横倒しになり、そこから赤い油が流れ出して沈んでいく。

「龍田さんが引きつけてくれたから、魚雷で狙いやすかったのです」

無線から電さんの声が聞こえてくる。

とりあえず、これで一体は倒した。妹と天龍さんは、と戦場を探す。

彼女たちは今まさに、ジャンプで飛び込んでくる深海棲艦と対峙しているところだった。

妹はまったく動かず、腰をやや落として刀を顔と水平に真正面へ、いわゆる八相に構えている。

もちろん、通常ならそんなことではない的である。

『大丈夫』

飛び込んで援護しようとしたわたしを、龍田さんが止める。

飛びかかる敵。それは大きく口を開けて妹の体に食らいつく。

が、その前に、妹と天龍さんは刀を振り下ろしてそれを左右に両断していた。

深海棲艦は死地に自らの勢いと重さで飛び込んでしまったのだ。

天龍さんが展開している力場に沿って血飛沫が飛び散る。

おんあみりたていせいからうん。

その足下で爆発が起こり、妹の体が揺れる。

「足下がお留守なのです」

電さんの雷撃で受けた傷から赤いものを飛び散らせながら、一回り大きなイ級が水面目指して突進する。大きく口を開けたその先には、妹が。

声にならない叫びを上げ、目を瞑ったままで夢中

で槍を横に振り抜く。

飛び上がってくる深海棲艦を、水面を薙いで斬るイメージで。

誰のものともされない金切り声が響く。続いて、重い金属の音。

恐る恐る目を開くと、口元がざっくりと割れた敵の顔面に、妹が刀を叩きつけていた。

脳裏に春苑さんの言葉が蘇る。意志することが第一歩だからと。

わたしは妹を守りたいと意志した。それが深海棲艦への一撃になったのだろうか。

「油断してたぜ。サンキュな」

刀の血を払い、にっこりと笑う。

ああ、彼女はこういうところでも笑えるのだ。

「まだ仕事は残ってるのです」

電さんが赤く染まった海面を指さす。

春苑さんの乗る船が近づき、わたしたちはそこで

灰の入った袋を受け取る。

思惟層浄化のためにさまざまな宗教の聖句が書かれ、燃やされて圧縮されたものだ。

それを赤い海に撒いていく。

くいくむくえうるとさるすえっせあんておみなおぶすえすとうとてねとかとりかむふいでむ。

さらさらした粉末は風に乗る、触れた海を元の青へと戻していく。

かけまくもかしこきいざなぎのおほかみつくしのひむかのたちばなのをどのあはぎはらに。

一時間もせずにその作業は終わる。夜風が寒いくらいに涼しい。

船に戻ると、春苑さんが笑顔でわたしたちを迎え入れた。

「突然の初出撃でしたが、全員無事で結構。帰りましょう」

缶ジュースを渡される。気がつけば喉がからから

になっていたので、これは嬉しい。

全員飲み物を飲んだ後は、不思議と誰も喋らなかった。

わたしは何を言っているかわからなかったから。

他のふたりに春苑さんもそうなのだろうか。



陸に戻ると、鎮守府にある浄化用のシャワールームへ。全員が交代で入る。わたしは最後に。

『初陣、どうだったかしら？』

「実感、ないです」

シャワーを浴びていると、龍田さんが話しかけてきた。普段、わたしと彼女はもっぱらこのシャワーで話をしている。女の人とふたりきりでいるようで、ちょっと恥ずかしい。

『人間の感覚はちょっとわからないけど、多分、そんなものよ』

そういえば、龍田さんは軍艦だった。それなら、

そういう人たちがいた記憶を持っているのだろうか。

『適しているか適していないかは別にして、段々慣れていく。そんなものじゃない？ って、人間じゃない私が言っても説得力ないか』

「龍田さんはわたしに良くしてくれています。今日だってほとんど任せきりでしたし」

『ありがと。あなたもいい子よ。そうじゃないと今日みたいな動きはできないんだし』

どこまでが本心かわからないが、ちょっとくすぐったい。

『失礼ねー、本音を言うに決まってるじゃない。あ、ごめんなさい。また伝わっちゃった』

「そうですね。龍田さんもわたしも、だいたいわかっってしまうから」

笑いと一緒に少し涙が出る。涙と一緒に笑いなのかもかもしれない。

『そうそう。だからもう少し自信を持っていいわよ』
頷いて、涙を洗い流すとシャワーを止める。



体を拭いて普段着のブラウスとスカートでオフィスに戻ると、春苑さんがテーブルの上にお菓子と食べ物が増えていた。

「これから六時間は最活性を警戒しての待機だけど、ささやかな戦勝会くらいはいいでしょう。お酒がないのは残念だけど。飲み物準備してて」

わたしたちは各自ホールの自動販売機で飲み物を出す。職員用なので無料なのは少し嬉しい。春苑さんの分もオレンジジュースを取り、部屋に戻って渡す。

「それじゃ、初出撃と勝利、そしてみんなの無事を祝って、乾杯」

「かんぱーい」

「乾杯なのです」

「乾杯」

飲み物を一口飲み、チョコレートに手を伸ばす。
一口食べたところで、丁度夕食前に出撃したからお腹が空いていたことに気づく。

「そういえば、食事がまだだったよな。兄貴」

妹もお腹が空いていたらしく、いなり寿司を食べ
ている。

「こっちもそうだったのよ。移動中に呼び出し食ら
っちゃって」

こちらは巻き寿司を食べている春苑さん。電さん
も唐揚げをつまんで頷いている。

「みんな食べそびれてたんですね」

「人が少ない弱小部署の割に拘束長いから、シフト
組めるくらいに人がほしいわ」

「どこも今期初めて設立されたテストケースなので
す。人員補充があるにしても先の話なのです」

電さんのツッコミに、春苑さんは大きなため息を

漏らす。

「船魂の研究機関って名目なんだし、研究室のコネでなんとかならないかなー。電ちゃんの後輩にイキのいいのいない？」

「手が空いてたらとっくに回ってきてるのです。形而上生物学の研究室なんて年に数人しか入らないのです」

「そっかそっか。あの事件以来志望者がちよつとは増えたらしいけど」

そのまま春苑さんと電さんは愚痴と学生時代の思ひ出話に入ってしまったから、わたしはそつと部屋から退散して、外に出る。

夜風の冷たさがわたしの肉体と外界の境界を明瞭にする。

「お、兄貴も出てたんだ。あっちはあっちで盛り上がってるからよ」

妹も建物から出てきた。彼女もわたしと同じブラ

ウスだが、下はスラックスだ。

よく考えたら逆なのだろうが、わたしたちはこれでいい。

「さっきは、ありがとな」

背中から手を回され、体が密着する。筋肉がしやなかに硬く、熱い。

「夢中になってただけだよ」

「俺のこと、助けてくれた」

耳元で囁かれ、吐息が熱くなるのが自分でもわかる。

「駄目だよ。仕事のことだから」

何が言いたいのか頭がぐるぐるして自分でもわからないけど、何かいけない気がしてそんな言葉が口をついて出る。

ぷっ。と吹き出す音。妹だ。

「あはははは。そりゃそうだ。仕事のことを持ち込むのはずるいよな」

爽やかに笑うと、彼女はわたしの手を握ってくる。

「兄貴は真面目だなあ。俺が兄貴だったら、我慢できなかったかも」

「何の我慢なの。それに、仕事のことだって言ったのは本気だから」

命を守ったとか、守られたとか。そういう貸し借りで優しくされたくはない。

「わかったよ。俺もそんなことを理由に兄貴を口説かない」

そんなことを真面目な顔で宣言されても、困ってしまう。

かっこよすぎるじゃないか。

また顔が熱くなるのを実感する。

「口説くって」

「そっか。俺たちもう付き合ってるか？ でも、そんなときは何て言えばいいんだ？」

「馬鹿」

熱くなった体を夜風が冷ます。

ふたたび、わたしと外界の境界が明瞭になるが、今度は背中の向こうに妹がいる。薄皮一枚隔てた自分ではない存在。

もう少し、もう少し近くへ行きたいが、此方にはなれない彼方。

「もうちょっと、このままでいいか？」

「わたしも、もうちょっとこのままで」

体温が混じり合い、境界が曖昧になるが、此方は此方、彼方は彼方。

それを、風が運んでくる冷気が包んでいる。

こんなとき船魂のふたりは出てこない。気を利かせているのか、彼女たちも互いを感じているのか。

何もわからないが、ただ、星は綺麗だった。

「待機が何もなく終わって、帰ったら。明日の朝さ」

真面目な声音で妹が語り出す。

「兄貴の朝飯が食いたい」

それは、多分わたしたちが日常へ戻るための儀礼だから。

「いいよ。今日作ったのでよければ」

明日になったら、一緒に食事をして、またここに来よう。

そして、またいつも通りに訓練して、退屈な書類仕事だ。

いつかこの非日常も日常になる日が来るのだろうけど、わたしたちにはまだ早い。

だから、それまでは。

〈了〉